

# 「とやまに7年制の高等学校を」

きゅうせい

# 旧制高校の生みの親

ば ば  
馬場 はる



## 受験生の母親の気持ち

「金沢の高等学校へ行こうか、それとも東京の高等学校にしようか、悩んでいます」

馬場はるさんは、長男の正治さんから、高等学校（旧制高等学校）への進学について相談されました。

このころ（1920年ごろ）は、全国的に高等学校の数が少なく、しかも入学試験はたいへんに難しいものでした。

高等学校のなかった富山では、中学校より上の学校に進学するには、金沢や新潟、東京などに出なければならなかったのです。

できることなら、金沢へも東京へも行ってほしくはない。

はるさんは、母として、まだ少年らしさが残っているわが子を、遠いところにやるのは不安でした。しかし、富山には上級の学校がないのです。



富山県に高等学校がないために  
進学をあきらめるなんて、かわいそう...  
もっと勉強したい子どもたちのために  
公立の学校をつくってもらいたい。

多額の寄付をした  
はるさんは、  
どんな人だった  
のかしら...?



はるさんは、  
どうして学校  
づくりに興味  
をもったのか  
な？



馬場はるさんは、富山  
県初の旧制高等学校を  
創設するために、多額  
のお金を寄付したんだ。



## 2 文化の花を咲かせよう

### 馬場はるさんのミニ表

西暦	年齢	
1886年		下新川郡泊町（現在の朝日町）の小沢家に生まれる
1901年	15歳	上新川郡東岩瀬町の馬場家に嫁ぐ
1919年	33歳	夫の道久が亡くなったため、子育てをしながら、家業を継ぐ
1923年	37歳	旧制富山高等学校を創設するため、大金を寄付する
1971年	85歳	亡くなる
1995年		馬場記念公園内に、胸像が建てられる



馬場家の人々。はるさんは、前列の右から2人目。

「…あなたの行きたいところを、選びなさい」  
はるさんは、そう答えるしかありませんでした。  
やがて、正治さんが東京の学校に進学し、はるさんのもとを去ってしまうと、あらためてさびしさがつりました。

また、かなりのお金がかかるという理由で、たくさんのお子もたちが進学をあきらめているという話を聞くうちに、はるさんは、何か自分にできることはないだろうかという思いを強くしていきました。

「これからの子どもたちのため、また母親のためにぜひ富山に高等学校をつくってあげたい」

こうして、はるさんは、富山に高等学校をつくるという、壮大な夢に挑戦していったのです。

### 私立ではなく公立の学校を

はるさんは、さっそく行動を開始しました。当時のお金で100万円を富山県に寄付し

「富山に7年制の高等学校をつくってください」と願いだしたのです。当時の富山県の予算の、約12分の1にあたる大金でした。

高等学校をつくることは、県民の長年の夢だったので、県の担当者はたいへん喜びました。

「せっかくのご寄付ですから、私立高校にして、馬場高等学校という名前にしたらいかがでしょう」

「いいえ、授業料の高い私立では、意味がないのです。お持ちの家の子でなくても学べる、県立の高校にしてください」

「公立の学校にするとしても、7年制の高等学校は全国に私立の2校しかありません。3年制の高等学

校にされてはどうですか？」

はるさんは、毎晩遅くまで、無理を重ねる

ように受験勉強をして

いたわが子の姿を思い

浮かべました。そして、

ただ見守る

しかなかった母のつらさも、思い返しました。

「いいえ、中学校から高等学校まで無試験で進める7年制の高等学校でなくてはなりません」

はるさんは、子どもたちには受験勉強で苦しむよりも、じっくりと落ち着いて勉強に取り組んでほしいと考えたのです。

県の担当者ははるさんの強い希望に、首をたてにふるしかありませんでした。

こうして、1923（大正12）年、公立では日本初の7年制高等学校である富山高等学校（現在の富山大学）の設立が認められ、次の年に開校したのでした。

### 私財を社会のために

その後、はるさんは、より良い学校にするために寄付を続けました。



馬場家（富山市東岩瀬）







富山大学附属図書館のヘルン文庫を訪れる朝日町立南保小学校のお友達。  
(4年の長崎照平さん、更田祐太郎さん、5年の越間遼太さん、佐田葵さん、  
6年の殿村優斗さん、佐田彩華さん、水島一輝さん)

その結果、寄付したお金の総額は、なんと161万円以上になりました。

はるさんがお嫁にいった馬場家は、江戸時代から続く船問屋であり、北陸でも有数のお金持ちでしたが、それでも寄付の金額があまりに多いので、親せきの中には、はるさんの行動を快く思わず、非難する人もありました。

「なぜ、そんなに多額の寄付をするんだ」「馬場家の先代が、苦勞してたくわえた財産だからこそ、社会のために有効に使ってほしいのです。亡くなった先代や私の夫も、きっとそれを誇りに思うことでしょう」

親せきが集まって話し合いをしたときも、はるさんは静かに、しかしきっぱりと自分の考えを話し、

反対する人を説得しました。

というのも、はるさんは、人のために、地域のために、できる限りのことをするのは当たり前と考えた人だったからです。

はるさんは裕福な小沢家で生まれたのですが、「粗食に甘んじ、絹物を身にまとわず、礼儀を重んずる」という家訓に従って、厳しく育てられました。

また、水害やききんなどがあると、食べ物配つたりお金を貸したりするなど、地域の人々のために尽くす家の人の姿を見ていました。

そんなはるさんにとっては、寄付の金額よりも、どんな事業に寄付したらよいかということが問題でした。

そうだ、未来をになう子どもたちを育てる教育、ひとつづくりにこそ、お金をかけなければー。

はるさんはそう考えて、学校のための寄付を決心したのでした。はるさんは、女手一つで一男三女を育てるうちに、学問の大切さを感じていたので。

## ヘルン文庫に込められた願い

「ヘルン文庫を、ご存知ですか？」

はるさんは、初代校長の南日恒太郎さんから、ヘルン文庫について相談を受けました。

ヘルン文庫は、作家で英文学者のラフカディオ・ハーン(小泉八雲)さんの遺した蔵書です。

ハーンさんが亡くなった後、のこされた家族がたくさんの本を管理していたのですが、もし、まとめて保管してくれるところがあれば、譲りたいという話でした。

## ヘルン文庫

ハーンさんは、日本の文学や民話などに興味を抱き、奥さんのセツさんに説明してもらいながら、江戸時代から伝わる古い本を集めて、研究しました。

そのため、ヘルン文庫には、滝沢馬琴、十返舎一九、山東京伝に関する貴重な本が収められています。また、日本の妖怪や怪談に関する本も多くそろっています。



富山大学にあるヘルン文庫



ラフカディオ・ハーン：1890(明治23)年に日本を訪れ、小泉セツさんと結婚して日本に帰化し、小泉八雲と名乗りました。日本の昔話や伝説に興味を持ち、文学作品を通して、日本の文化を世界に紹介しました。

江戸時代に正確な地図を作成した測量家

石黒 信由



(高樹会所蔵)

馬場はるさんのように、学問の世界に貢献した先輩がいます。江戸時代の終わりころ、正確な地図を作った石黒信由さんです。

信由さんは、若いころから学んだ和算(日本独自の数学)や測量技術の実力を認められ、放生津瀧や十二町瀧などの測量、舟倉野用水の計画など、重要な藩の仕事を任されていました。

信由さんが43歳のときのことです。詳しい日本地図を作るために全国を回っていた伊能忠敬さんと出会い、さまざまな道具を見せてもらいました。

刺激を受けた信由さんは、夢中で測量道具の研究に取り組みました。

その後、加越能三州(越中・加賀・能登)の測量と地図づくりを任された信由さんは、自分なりに工夫したさまざまな道具を使って、領内を歩き回り地図を完成させました。

完成した地図「加越能三州郡分略絵図」は、現在の地図と比べても、誤差はたったの数パーセントという正確さでした。

これは、当時、世界的に見てもトップレベルであったそうです。

「そのヘルン文庫を、新しくつくられる富山高等学校の図書館に、ぜひ入れたいのです」

「ヘルン文庫は、南日先生がそんなに関心をおもちになるほど、学問的に価値のあるものなのですか」

「ラフカディオ・ハーン氏は外国人ですが、古い日本の文化を心から理解し、日本に帰化するほど日本を愛し、日本文化を世界に紹介しました。彼の蔵書は、たいへん高価なものですが、世界的にも貴重な財産なのです」

はるさんは話を聞いているうちに、ヘルン文庫こそ、富山の教育の光となる新しい学校にふさわしいと思うようになりました。

「わかりました。開校の記念として、ヘルン文庫も寄付することにしましょう」

こうして、はるさんは購入資金を提供し、「耳なし芳一」や「むじな」などの作品で知られるハーンの蔵書を、富山高等学校へ贈ったのです。

このように、はるさんは、富山高等学校の創設に熱心に関わりました。

はるさんのおかげで、たくさんの方が地元で進学できるようになり、やがて、さまざまな分野で活躍するようになりました。

はるさんの熱意と寄付でつくられた富山高等学校の歴史は、現在の富山大学に受け継がれ、ヘルン文庫も富山大学附属図書館に大切に保管されています。

ヘルン文庫には、洋書2071冊、和漢書370冊、ハーンさん手書きの原稿「神國日本」1200枚が保存されています。



馬場はるさんの座像

ヘルン文庫の「ヘルン」とは、ハーンさんが自分の名前を、ローマ字風に呼んだものなんだって。

はるさんは、まさに富山県の「学校の母」だったんですね。



次のページで紹介する角川源義さんは、馬場はるさんと同じように、若い人々のために何かしたいと考えた人です。角川さんは、日本文化を盛り立てようと出版社をおこしました。